

ほんきのはびちら



インドのある村に、マホサダーという、たいへんかしこい子どもがいました。マホサダーのうわさは、とうとう、お城の王さまの耳にもとどきました。

「大臣よ、マホサダーという、たいへんかしこい子どものことが、あちこちで評判になっているのだが、いちど会ってみたいものだ。」

「王さま、たしかに、評判は評判ですが、そこいらにいる子どもと、そんなに、かわらないとおもいますよ。」

「どうして、そんなことがわかるのだ。」

「うわさなんて、そういったものでございますよ、王さま。」

大臣も、マホサダーのことは、耳にしていました。

たしかに、かしこいだけでなく、知恵のある子どもだということも、聞いていました。ですから、それだけに、よけい王さまに、会わせたくなかったのです。

もしも、王さまに氣にいられて、大臣にでもするといわれたら、じぶんの立場がなくなってしまう。

ある日のことです。

王さまは、大臣をつれて、お城をおでかけになりました。

「大臣よ。」

「は。。」

「きょうは、となりの町まで、でかけてみようか。」

「よろしゅうございますね。町や、村のようすをごらんになることも、王さまのおしごととしては、たいせつなことでございます。」

王さまは、大臣とのふたりづれでした。